

手 広 遺 跡
発掘調査終了報告

(1978年7月10日～同20)

1979年2月

竜郷町教育委員会



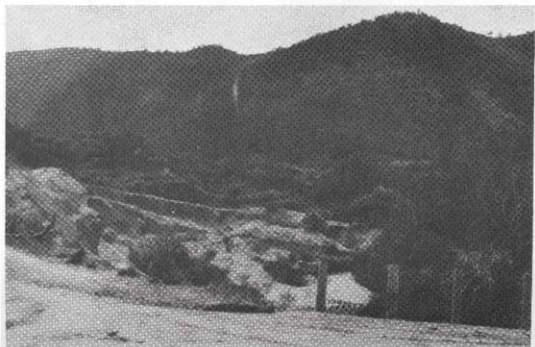
手広遺跡の位置

北大島では東海岸側に多くの遺跡が発見されている。

手広遺跡もその一つである。東側は、海に面した後方西側は底湿地を隔てて急峻な小山塊につづき奄美で多く見られる遺跡の立地条件をそなえている。遺跡の北側には手広川が流れており、上流には湧き水もあり、当時は湧水源として使用されたものと考えられる。



手広貝塚遠影



手広貝塚近影

第1層	a 表土 白砂層 b 表土 黄砂層
第2層	褐色砂層 (兼久式土器片・柱穴遺構出土) これを第1文化層と呼ぶことにした。
第3層	灰褐色砂層
第4層	白砂層
第5層	褐色砂層 (無文土器片・チャート・黒曜石チップを含む) この層を第2文化層と呼ぶ。
第6層	白砂層
第7層	褐色砂層 (完形土器・外耳土器などを含む) この層を第3文化層と呼ぶ。
第8層	黄褐色砂層
第9層	褐色砂層 (石皿・無文土器片を含む) この層を第4文化層と呼ぶ。
第10層	黄褐色砂層
第11層	a 褐色砂層 (宇宿上層を主に出土) b 暗褐色砂層 (宇宿上層・喜念式土器片を含む) a・b層を第5文化層と呼ぶ。
第12層	黄褐色砂層
第13層	暗黄褐色砂層 (軽石・小石を含む)
第14層	黒色砂層 (面縄西洞式土器片を含む。また大きな石や小粒の軽石も含む)
第15層	灰褐色粘砂層
第16層	黒色粘砂層 (レキも混ざっている)
第17層	黄褐色粘土層
第18層	青灰色粘土層 (木炭の微片等を含む)
A・B	C-14年代測定用資料採集地点。



土層模式図

第1文化層

第1文化層は、褐色砂層で厚さ約30cm、出土遺物は土器片・イノシシの頭骨・魚骨・焼けた貝類・貝片などが多く出土した。



不定形の小鉄片

これらに
伴ってセメント色の焼きじめ陶器1点、不定形の鉄片2点、渦石片1点も出土している。遺構としては32ヶのピット群が発見された。このうち28ヶのピットから石や貝殻が検出されたが、いづれもピット中央部ではなく壁に沿う形で発見された。このことは各ピットが柱穴である可能性の高いことを示している。発掘面積が小さいため全体としての配列などをたしかめることはできなかったが、兼久式土器の時代で掘立の平地式住居のあった可能性を指摘できる意義は大きい。

このような遺構や遺物は遺跡全体に広がっているものと思われる。また、炭化物も多く第1文化層全体に広がっていた(^{14}C 年代測定用資料採集)。今後、本調査をする必要性が充分にあると考える。



第1文化層

第2文化層

第2文化層は、第1文化層よりも発掘面積を西側から1.5m、南側より3mとトレンチを2m×12mと縮少して調査した。

出土遺物は土器片

貝刃・黒曜石・チャート・獣骨などがある。

土器片は無文で褐色または赤褐色、胎土は砂質のものと泥質のものにわけれる。これに伴って黒曜石製の打製石鏃やチップ、チャートのチップなどが出土している。遺構としては直径約1.5mの円形に近い形をした焼砂が検出された。焼砂は炭化物を多く含み、黒褐色に汚染されている。この部分の砂はかなり固く焼き縮まっているので、長期間にわたって火床に利用されたものと思われる。全体的に言って、第2文化層は、第1文化層に比べ、出土遺物がいちじるしく少なかった。



貝刃出土状況



焼砂遺構

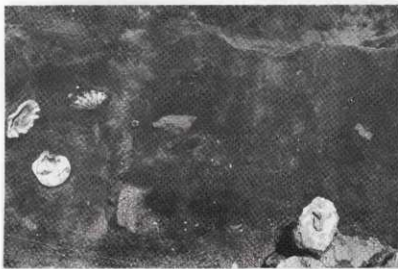
第3文化層



魚骨の出土状況

第3文化層は、北側に多くの遺物が集中していた。遺物は完形土器をはじめ大型の土器片や貝類が出土した。土器は褐色で小型丸底壺の完形土器・復元可能な外耳土器・編目圧痕のある土製品など特徴的なものが多い。これに伴って多量の魚骨・貝玉・炭化した果実なども検出された。遺構は石組遺構が北側にあり、大型石器類が割れて出土し中から炭化物や土器片が出土している。この石組は東側がすでに破壊され、西側はトレンチ外のため調査することが出来ず、石組遺構としての確認にとどまった。貝玉は製品から未製品のものまでが集中して1ヶ所より検出されており、ここで貝玉の製作が行なわれた工程を思

わせる。

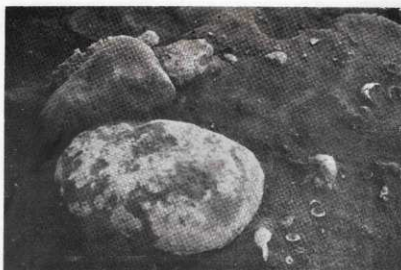


遺物の出土状況

石器はチャート黒曜石などのチップと一緒にスレート石材の磨製石器も出土している。第3文化層も全体的な性格がわかるような調査が必要である。

第4文化層

第4文化層は、褐色砂層で出土遺物も新タイプのもが多く出土した。土器については、赤褐色で砂粒子を多く含み、口唇部に3cm程の大きさ



石皿出土状況

の山形状の突帯を有する土器と、橙褐色で細砂質の皿状の土器がある。この土器は口唇部に巾5cm程のゆるやかな山形状の突帯を二対有し、胴部に小孔を持つ4ヶのつまみを持っている。皿形ではあるが、一種の釣り下げ容器か、もしくは蓋の可能性も考えられる。その他、無文土器が多かった。石器は石皿が一地点に二つ下向きに重なって出土し、石皿の下より炭化物で汚染された土・貝殻片が出土した。また夜光貝製の匙も発見されている。

生活復元の有力な手がかりになり得る地点であるが調査規模が限られたため遺構の性格を確認するに至らなかった。



貝ヒ出土状況

第5文化層

第5文化層は、トレンチの大きさをさらに縮少し5m×2mを調査した。

出土遺物は、口縁部が断面コマボコ状の特徴をもつ宇宿上層式土器を



土器片・獣骨出土状況

主として、頸部に沈線による文様を有する喜念I式土器とが出土した。その他獣骨・魚骨・貝類なども出土している。遺構は直径1m程の焼砂が検出された。

焼砂部分は炭化物が多く暗褐色を呈し、土器片・魚骨・獣骨・貝などが含まれていた。獣骨や貝類は焼けており、近くに拳大の焼けた石器が散乱していることから、マイクロネシア方面に一般的なストーン・ボイリングによる食物調理が行われた可能性が考えられた。

第5文化層は、遺跡全体に広がっているものと思われる発掘前の表採資料でもこの層に属するものが多かった。土器片は砂質・細砂質・泥質と胎土によって大きく3タイプに分けられる。



土器片出土状況

第6文化層

第6文化層は、第5文化層より約1 m下にあり、トレンチの大きさを2m×2 mにし調査を行った。出土遺物は土器片と石製品であるが、土器は2個体復元できた。石製品は5 cm程の大きさに「おむすび」型をした偏平な砂岩である。

土器は面縄西洞式と呼ばれる土器で頸部から口唇部にかけて区画的な文様を有する小型の鉢型土器である。もう一つは平底で無文の浅鉢型土器である。色調はいずれも赤褐色であるが胎土は前者が全体的に粗く、後者が細い、石製品については、偏平なおむすび形の礫の表裏に、深い刻線で箆目状の三角文が刻まれている。現在のところ、このような石製品は奄美で類例がみられず新資料の一つである。

第6文化層は、発掘面積が狭かったが、遺物を包含する層であることが確認出来た。また炭化物や魚骨に混ざってウニが多く出土していたことが目立った。他の文化層にくらべて比較的貝類が少なく、大きな石が多かった。



土器片出土状況

ま と め

今回の調査は、風雨による遺跡の破壊がいちじるしかった為に、すでに破壊された断面部分に沿ってトレンチを設定し、遺跡の確認調査を行った。発見当初、4つの文化層から成っていると思われていたが、調査の結果、6文化層からなっており、第2・3・4の文化層は今まで注意されなかった。それぞれの遺物包含層を検出した。第1文化層は兼久式を伴う遺構があり、奄美先史文化に新たな資料を得ることが出来た。第6文化層下は調査面積と期間が許されず地山と見られる層まで完全に確認出来なかったが、炭化物なども多く出土していることから新たな文化層がある可能性が大きい。全体的には6文化層までの確認にとどまったが、今後これらの資料を奄美先史文化解明の手がかりとして生かすためにも本格的な調査を行う必要が充分であると今回の調査で確信した。

(奄美考古研究会 中山清美)

最後に発掘期間中は地元手広地区民や町文化財保護委員、その他、大島高校郷土クラブ、地元研究者、報道機関をはじめ九州・沖縄などの各方面の方々から御指導、御協力を頂きました。深く厚く御礼申し上げます。

竜郷町教育委員会・奄美考古研究会

手広遺跡発掘調査終了報告

印刷・発行 1979年 2月 17日

編 集 奄美考古学研究会

発 行 奄郷町教育委員会

印 刷 (有) 広 報 社
電話 ②1138
